



# ふたりの歌



我が青春の回想録

ヴェルダ ヴォエート  
日本語訳 イシュトク さちこ

## ふたりの歌

---

美しく着飾った人々が劇場を埋めていた。こんなに綺麗に着飾った聴衆をかつて見たことが無い。私はと言えばセーターにウールのスカートという出で立ちで、オーケストラボックスのヨゼフの側に座っていた。こんな服装ではあの人達に混じって座る権利も無い、第一私には切符を一枚買うだけのお金もなかった。

でも私は幸せだった。私は特別なのだ。指揮者がヨゼフの側に座ることを許してくれたのだ。

ヨゼフの同僚達は私の存在を無視していた。でも私は確信がある。彼らは好奇心のため死にそうだった筈だ。私は私で無関心を装っていた。

番組はオペレッタ「チャルダースユの女王」。生き生きした楽しい音楽が劇場を満たした。当然のことながら私には舞台の上で何が起っているのか殆ど見えない。でも音楽や歌や踊る様子は聞こえた。

自分の番の途切れにヨゼフが私に聞いた。

「おならした？」

何と言う質問！

二十代の若い女性に投掛けるのに、何と言う質問！

でも私は彼に腹を立てなかった。ただ、「ううん」とだけ応えた。

彼は「じゃ、隣の奴だな」と言いしばらく鼻穴をヒクヒクさせてから自分の演奏に戻って行った。

「ダス イスト ダス レーベン、ダス イスト ダス レーベン／それが人生さ、それが人生さ。。」

私たちは歌いながら家路についた。彼が二人の従弟達と暮らしていたアパートに。実際はヨゼフは従弟達の客としての滞在で、ソファに寝ていたのだけれど。

そして、そんな訳で、このオペレッタが私たちの歌になった。

## 初めて逢った日の彼はシルエットだった

---

列車はケルンの駅に到着した。

私と同じく出口に向かう乗客は黒っぽい服装でみな背が高く、私は黒い森の中を歩いているような気がした。

プラットフォームの終わる辺りに大きな窓から入って来る光が見え、他のものはすべて陰の中にあった。逆に動いている乗客の群れの中に流れに逆らって立っているシルエットが見えた。

顔は見えなかったが私にはそれが彼だと判った。

近づいて、ようやくぼんやりと彼の顔の輪郭が判って来た。その彼の手には真っ赤に輝くバラが一輪。

私にキスし、そのバラを渡しながら彼は言った。

「バラ無しでのお出迎えは私の母が許しません」

日差しの明るい秋の午後のケルンの街を二人は並んで歩いた。

ヨゼフは私の重たいスーツケースを運んでいたが、真っ直ぐ歩くのに苦労していた。黄疸を患っていた彼はまだ充分健康を取り戻して居らず普段の力が無かったのだが、それでも強いて持ち続けた。

大きな伽藍の近くを通った時彼が言った。

「何時か二人であの塔に上ろうね、いい？」

その伽藍の僅かな一部が傷んでいるのに私たちは気付き、私たちが上りに来るまでには修理されている筈だと決めた。

私が思い出せないのはどのような交通機関を使って、ヨゼフが当時暮らしていた小都市オプラーデン行ったのかということ。

最初に、私たちはヨゼフが自分の空間を持っていた従弟達のアパートへ行った。

夕食後、彼は私をあまり見た目の良くないバーへ連れて行った。そしてカウンターで食器を拭いていた不機嫌そうな顔の男に何か話し、私を手招きした。

片隅の薄暗いあたりに階段があって、二階は安宿だった。部屋の中はまるでカラッポで、私が使えるものはベッドと机、それに一脚の椅子だけ。

ヨゼフが窓を少しだけ開けて、夜を通して外気が入って来るようにし、

「僕が出たら鍵を掛けなさい、明日の朝来るよ」と言って去った、私をたった一人にして。

飾り気も何にも無い部屋は侘しく居心地が良いとは言えなかった。そして、モスクアからブダペシュトへの途中で仲間達と泊まったチェコの兵舎を思い出させた。その兵舎には兵隊は独りもいなかったけれど、何故なのかは知らない。エスペランチストの誰かが私たちのために手配してくれた一夜の宿だった。

部屋の中は赤いバラ以外は色が無かった、私自身を含めて。

それが私たち二人と一緒に暮らす人生の最初の日だった。当然その時はまだその事を知らなかったのだけれど。

ドイツ、オプラーデンでの日々についてあまり多くの記憶が無い。

そこで、従弟の一人デジヨにあの時の寝室割当はどうなっていたのか聞いてみた。

彼からの即答はこうだった：部屋は二つしか無かったから、一つの部屋に僕たち兄弟が寝て、もう一つにあなたとヨゼフが寝たでしょう。

私は折り返し彼に再び書かなければならなかった。

「何言ってるの？ まず私たちは夫婦ではなかったのだから同じ部屋に寝る訳がないでしょう。それにあの部屋にたった一つあったソファは狭くて二人寝られる様なものではなかったのよ。私の淡い記憶ではあなた達兄弟の誰かが夜勤だったような気がする。そうじゃなかった？」

二度目の彼からの返事は「ああ、そうだ。僕はあの週夜勤だった。僕の記憶ではあなたは二三日しか滞在しなかったと思う。」

彼らのところに場所が無かったから私はあの最も最初の夜ホテルに寝なければならなかったのだ。多分どの日が私を迎えるのに都合が良いかなどは手紙でやりとりしていた筈だが、その頃の手紙はもう無い。

デジヨからの返事で、何故彼の弟のラツィとヨゼフと私の三人だけでレヴェルクーセンの日本庭園へ行ったのかなど、もう少し詳しく思い出すことが出来た。

ラツィは車を持っていたから、デジヨが私たちに邪魔されずに眠れるように、みんなで日本庭園へ行ったのだ。手元にあるあの庭園での数枚の写真も、あそこでどんなことがあったのかを思い出させてくれた。

彼らのところに、二三日どころかもっと長く滞在したと思うのは、滞在中の幾つかの出来事も思い出したから。

彼らのアパートは二階にあって、台所は無く、野菜や食器は浴室で洗っていた。

調理に火を使うには廊下にあるストーヴを使ったが、二階は二つのアパートに分けられていて、もう一つの方にはジョセッペと言う若いイタリア人が住んでいた。彼が一人暮らしだったのかルームメイトがいたのかは知らない。

いずれにせよジョセッペは私がストーヴで何かしていると必ず自分の部屋から出て来て何かと話しかけて来たのだ、私はイタリア語もドイツ語も判らないのに。多分彼はイタリア語で話しかけて来たのだと思う。

きっとヨゼフと私の会話を聞き、私たちの使っているエスペラントをイタリア語と思い込んだのだろう。それはあり得ることなのだ。いつかヨゼフが話してくれたのだけれど、イタリアでエスペラントで話しかけたら「何処の方言でしゃべっているのか？」と聞かれたことがあったと言うから。

私が彼の言っていることを全く理解出来ないと言うことなどジョセッペは苦にもしなかった。そして何時でも私が廊下に居ると必ず出て来るのだった。私は我慢出来なくなり、そのことをヨゼフに話した。次の機会にヨゼフはジョセッペをつかまえて言った。ヨゼフによればこう言ったのだ。

「彼女は僕のものだ。夢にも君のものにしようなどと思うな！」

以来、ジョセッペに患わされることは無くなった。

その頃ヨゼフはカナダへの移民のための準備をしていた。もう移民としてカナダに入国するためのヴィザも貰っていたのだと思う。

遅い秋だった。私たちはオプラーデンのと或る公園を散歩していた。大きなスズカケの葉が小径に散り敷き、歩くと乾いた音が足元に響いた。その音は二人の胸に殊更に悲しみを呼び起こした。

散歩の途中でベンチに腰を下ろした時、ヨゼフが財布から何か取り出した。それは畳んだカナダの紙幣、紫色の十ドル札だった。カナダに巧く移民出来るようにと、長い間大切に持ち歩いていたお守りの十ドル札なのだ。

彼はそれを私にくれて言った。

「今度は君が持っていてよ、君もカナダに来られるように。財布に仕舞っておいて」  
私は言われるようにした。

何十年も経って、彼が逝ってから何年も経って、ふと気が付いたのだが、彼は私に結婚の申し込みなどしていなかった。そんなことがあり得るのか。

多分、求婚の代わりに紫の紙幣をくれたということなのだろう。私たちに言葉は不用だったのだ。二人の心の中では既に決まっていたことで、ごく自然なことだったのだ。もっとも、その十ドル紙幣は私より遥かに早くカナダへ飛ばなければならなかったのだけれど。だって、ヨゼフは「飢えたる移住者」で、その10ドルを送ってくれるよう懇願してきたのだったから。

ふたりの歌  
(Nia kanto)

<http://p.booklog.jp/book/49878>

著者 : verdavojeto

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/verdavojeto/profile>

日本語訳 イシュトクさちこ

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/49878>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/49878>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社paperboy&co.